

クリエーション・カプセル

篠原 功 (酪農学園大学)

Creation Capsule

Isao SHINOHARA

時々刻々と変化する気象的社会的経済的技術的環境に酪農場はどう対応すべきか、を念頭におき、私たちは「酪農場の土-草-牛系における無機要素の循環」と「過熟社会における酪農場と草地開発の視点」についての研究を進めている。今回は営農現場と研究を繋ぐ「クリエーション・カプセル」の開発構想について紹介する。

かつて道内の営農現場で乳牛がミネラルの過不足とそのインバランスによる疾病の多発に陥り、その原因の一つに、土壌からの無機要素(窒素とミネラル)供給に過不足があったが、これらは土壌を含めた栄養改善によって疾病は多発しなくなった。ところが数年後、先に過剰であったミネラルは不足し、不足していたミネラルは過剰となって新タイプの疾病を引き起こした。さらには、それまで乳牛の健康に異常を認めていなかった別の酪農場で後の事例と同じころ、先の見聞情報に基づき栄養改善を積極的に実施したことが遠因とみられる疾病が多発したことである。また最近の府県の事例では家族経営のなかでの乳牛多頭省力飼育と労働力高齢化や、後継者に嫁がなく年老いた父母が病院通いをするなかで乳牛疾病が多発した。

これらのなかにもその遠因が人間社会の在り方と深く係っているものがあると考えられた。

そこで右図は、これらの事例をカギとして「二十一世紀型酪農場と勤労者のための営農社会環境の整備目標」を描いたものである。図中の「嫁の

来る営農企業集団」という言葉は家族経営方の酪農場から企業経営型の酪農場への移行形態としての意味を持たせているもので、システム完成後の経営は株式会社酪農場をめざしている。そしてその規模は「現役勤労者10~20人、農地500ヘクタール、搾乳牛250頭、育成牛・肉牛羊など500~1,000頭を飼育し、生産物の一部を同一企業内で加工し、流通パッケージ等も含めた付加価値生産を行う」というものである。

しかし、なお何か足りない。その一つの仕掛けがクリエーション・カプセル(心を育てる創造の小箱・企業内ミニ大学)であろう。人がこの世で人として生きるのは自己の発見であり、それは真実・実際のなかの真理と出会ったときの感動とその己であると言う。その具体的仕掛け、例えば土壌水質化学では現場を預かる人々が簡便確実なpH・ECテスターなどを携帯活用して大自然と語り合う科学的観察から始まる。それが、すなわち少しで良いから手づくりの情報解析用データとセミナーを同時に合わせ持つことが情報過多・外注データ時代への確かな対応の第一歩であると考えられる。

